

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

政治の中心が移るにつれて文化の中心も移った。鎌倉文化の特色は、  
 京都文化の貴族的なのとちがって、すべてが平民的へいみんてきなところあに在る。  
 わけてもこの時代に起こった新しい仏教ぶつきょうに於いて、それがはっきりとわかる。

### 鎌倉武士の気風

頼朝よりともが武士道ぶしどうを励ほげました後あとを承うけて、北條氏ほうじょうしも質素しつそ儉約けんやくを重おもんじて、盛さかんに尚武しょうぶの風ふうを奨すすめたので、当時の武士は一般いふふに勇武ゆうぶで、苟いやしくも卑怯ひきょう未練みれんの振舞ふるまいはをするかつことを恥よりともぢた。嘗さだつなて頼朝は家来きらいの佐々木定綱さだつなに送こった手紙てがみの中に、

「武士道ぶしどうというものは、僧そうなどが仏ほとけの戒いましめまもを守るほんらいのと同じようにするのが本来である。もともと武士は国の固かためで、帝王ていおうを護まもり奉たてまつる器うつわである。又、今は鎌倉の将軍しょうぐんの支配しはいの下もとに在あって国土こくどを守護しゅごすることになっているのであるから、錐きりを立てる程ほどの所りょうちを領地ちようとしている者も、1、200町ちようを持っている者も、志こころざしはいづれも同じく、その代わりには命いのちを君きみに差さしあみげる身みなのである。自分の勝手かってにすることのできる物ではないと心得こころえていなければならない。それに就ついては、身みを大事だいじにし、心こころを長ながくして、軽々かるがるしく振舞ふるまわず、小敵しょうてきであっても侮あなどることなく、落おち着ついてよくよく思案しあんするのが大切たいせつである」

という意味いみの事ことを書かいたが、これは最もよく武士の心得こころえを説といたものであり、武士道ぶしどうといえ、ただ強くさえあればよいというわけのものではなくて、主従しゅじゆうの恩誼おんぎを重おもんずるという事が最も大切もつとな切たいせつなのです。

ですからこの時分の武士は、ふだんは質素しつそ儉約けんやくを守まもって、数多あまたの郎党ろうとうを養やしない、良い馬よいうまを飼かいおき、一旦たんじへん事変じへんが起おこると、それらの郎党しゅげんやくを率ひきいて、主君しゅきんのために命いのちを惜おしまずに働はたらくのを第一だいいちの目的もくとしたのであります。「額ひたいに矢やを受けるとも、背せには矢やを立てない」というのが、鎌倉武士の意気いきを示こした言葉ことばでした。

### 簡易な日常生活

従したがって、武士は平素へいその遊戯ゆうぎなども、平安時代の朝廷へいあんじだいの役人しやくにんらが、詩歌しにかや音楽おんがくを楽しはんたいんだのとは反対はんたいに、犬追物いぬおもの、笠懸かさかけ、流鏑馬やぶさめ、相撲すもうなどの勇ましいものを喜び、その日常にちじようの生活せいかつも、京都きんぎよの役人はならの華やかなと違って、つとめて簡易かんいを旨むねとしました。

家屋かおくは、板塀いたべいまたは築地つきちで囲かこい、茅ちがや、板いたなどで屋根やねを葺ふいて、すべて飾かざりを避さけて実用じつじように適てきするようにした所謂いわゆる武家造ぶけぞうりとなり、服装ふくそうは、もと貴人きじんの寝衣ねまきに用もちいた直垂ひたれを着きて、烏帽子えぼしをかぶるのを普通ふつどとしました。

食物たべものもまた極きわめて粗末そまつだったことは、時頼ときよりが味噌みそを肴さかなに宣時のぶときと酒さけを酌くみかわしたのでも知られます。

### 鎌倉時代の学問

こういう風ふうに、この時代には専もつぱら武ぶを重おもんじたので、書物しょぶつに親したしむ者は少すくなく、学問がくもんは一般いふふに

ふ  
振るわなかった。

ただ、北條義時の孫の実時が、武蔵の金沢(現横浜市南端)に文庫 — 今の図書館 -  
を設けて、和漢の書籍を多く集め、学問をしたい者には自由にこれを読ませたりして、子弟  
を教育したのが珍しいくらいのことでした。この文庫の跡は今も金沢の称名寺の  
境内に残っていて、その当時の書物も一部分は保存されています。それには、右に載せ  
たような「金澤文庫」という印が捺してあって、昔の事を懐かしく思い返させます。



かなま ぶん はったつ  
仮名交じり文の発達

学問のうちでも殊に漢文学は、平安時代の中頃から大いに廃れ、僧侶が仏教を研究  
するためにこれを学ぶくらいのもので、正式の漢文を綴るものなどは殆どいなくなった。その代わりに、  
仮名交じりの文が次第に盛んになり、ついにこの時代になると大いに発達して、折から尚武の気風が盛ん  
でもあり、また、戦乱の後を承けてもいたりするので、この仮名交じり文で描いた軍記物が多く現われた。

ぐんきもの  
軍記物

『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』『平家物語』などがそれで、いづれも漢文よりも遥かに平易でし  
たので、広く一般の人々にも愛読され、中でも『平治物語』は琵琶に合わせて歌われたりして、永く世に  
もてはやされました。

このうち、『保元物語』と『平治物語』とは保元の乱と平治の乱との顛末を記し、『源平盛衰記』と『平  
家物語』とは共に平家の盛衰を述べたものですが、その文章は、漢語や武士の言葉などを自由に交えて、  
全体に調子が勇壮で、波瀾に富み、平安時代の国文学の優美一方なのとは全く異なった趣がありました  
た。これらの書物は、いづれも作者名はいろいろに伝えられて、確かには分かっていません。

また、軍記物の外にも、鴨長明の『方丈記』は、この時代に出た随筆として有名です。その頃  
の世の有様や人事に対する感想を書き記したもので、今も世に愛読されています。

わか りゅうせい  
和歌の隆盛

和歌は、後鳥羽上皇が殊にご熱心であられたので、京都に於いて頗る盛んで、名高い歌人が多く出  
た。藤原俊成、その子の定家、西行法師、藤原家隆などは、その中でも殊にすぐれた人々でした。ま  
た、鎌倉の第3代将軍実朝が和歌の名人でしたことは、第二巻「平安時代後期、鎌倉時代」の「第22話  
源氏の滅亡」で述べた通りです。藤原俊成が歌を詠む時にはいつも白い浄衣を着て、ちゃんと坐って、  
桐火桶を抱きながら心静かに詠んだという話や、定家が我が家で歌を詠む時には、必ず南面の障子を開か  
せて、遠く外を望み、衣服を整え、正しく坐って詠んだという話などは、いかに彼らが歌を大切なもの  
としていたのかわかる話です。彼らは決して等閑に詠み棄てたりはしませんでした。俊成の歌は、

ゆう の べ あきかぜみ うづら鳴くなり深草の里  
夕されば野辺の秋風身にしみて うづら鳴くなり深草の里

などに見るように、その姿が何となく上品でした。又、定家の歌は、

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

はる よ ゆめ はし みね わか よこぐも そら  
春の夜の夢のうき橋とたえして 峯に別るゝ横雲の空  
しも そら し はるさめ ふ  
霜さそう空に知られしかりがねの かへるつばさに春雨ぞ降る

などに見るように、思いつきの新しいところや言葉の上の言いまわしの面白さなどにその特色はあったが、それと同時に、わざとらしい細工の跡もいくらかは目に着くところもある。これがこの頃の世の風でもあったのです。

### 新古今和歌集

また、藤原定家は、家隆らと共に、後鳥羽上皇の仰せを受けて、土御門天皇の御代に『新古今和歌集』を撰んで上った。巻数二十。和歌は凡そ千九百首を集めている。醍醐天皇の御代に『古今和歌集』が撰ばれてから第八代の勅撰集ですが、『古今和歌集』以後では最も優れた歌集といわれ、今日でも『古今』『新古今』と常に並び称されている。彼はまた、嵯峨天皇が小倉山に閑居した時に、天智天皇から彼の代までの歌人のうちの百人について、各一種づゝのすぐれた歌を撰んで、これを書いて壁に張ったと伝えられる。これが今も世に珍重される小倉山百人一首です。

また、藤原家隆はそのころは定家と並び称せられた人で、殊に多数の歌を作ったので知られています。その作は実に六万首にも及んだということです。

たびと そで ふ あきかぜ ゆう ひ やま はし  
旅人の袖吹きかへす秋風に 夕日さびしき山のかげ橋  
なが そで しぐれ ふ ありあけ つき  
眺めつゝいくたび袖にくもるらむ 時雨に更くる有明の月

などの歌でも分かるように、その姿はすらっとしているだけで平凡ですが、印象ははっきりしている。

### 西行法師

また、西行法師は嘗て伊勢神宮に詣でて、

なにごと おはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるゝ

と歌った。西行法師はもと、鳥羽上皇に仕えた北面の武士で、本名を佐藤義清と言ひ、藤原秀郷の九世の孫で、武勇にすぐれ、ことに弓馬の道に達していたが、ある時、親族の憲康という者と鳥羽殿に参上して還りに、明日も一緒に参上しようとして約束して、翌朝、憲康の家に来ると、泣声の内から聞こえている。どうしたのかと怪しんで入って見ると、憲康が昨夜にわかに死んだのでした。佐藤義清は早くから世を厭うていたのですが、ここに至ってよいよ世の無常を感じて、ついに23才で官を辞して僧となったのでした。その後は悠々と諸国をめぐって、心のまゝに歌を詠んで身を終ったのです。嘗て桜の花を詠じて、

ねがはくは花のもとにて春死なむ そのきさらぎの望月のころ

といったが、その言葉通りに、後鳥羽天皇の文治5年2月16日、河内国の弘川寺で亡くなった。年は73才でした。その3年前の文治2年に、彼が奥州に下ろうとして鎌倉を通った時に、頼朝から是非に懇望されて、弓馬の道を説くと、頼朝は非常に喜んで、そのお礼にと銀製の猫を贈ったが、西行は館

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

を出ると直ぐに、その門前に遊んでいる子供にこれをくれてしまったという話も有名です。

心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ澤の秋の夕ぐれ

という歌でも分かるように、西行はよく物の哀れを歌いました。

### 平易な新仏教

しかし、鎌倉時代の文化の上に最も大きな影響を与えたものは、新しく起こった平易な仏教です。奈良朝から平安朝にかけての仏教は、概して貴族的でした上に、どちらかといえば現世的で、専ら上流の人々がこの世の苦楽についての祈祷をするのがその目的の主なものでした。ところが、院政の頃から、例の僧兵という者がしきりに跋扈して、人を救うべき僧侶の身でありながら、却って乱暴を働いたり人を殺したりするようになったので、これまでの仏教は次第に信仰されないようになって来ました。

しかし、一方で、保元、平治の乱から源平の戦いにつづいて、昨日までは栄えていた者も今日は一族ごとく悉く亡びるといような、—— 例えば、義朝の敗北と共に源氏が殆ど亡び、「平氏でないものは人ではない」とまで威張っていた平家でさえ、忽ち壇ノ浦の没落となって、一族悉く西海の藻屑となるといような、—— まことに定めのない世の有様となったので、人々は無常を感じて、この世の幸福を願うよりは寧ろ死後の安楽を祈る風が盛んになって来ました。而も今度は、直接に戦争に従った武士やその下の平民にこの宗教心が動いて来たのですから、これまでのような、むづかしい学問や面倒な修業の力で漸く信ずることの出来るようなものではなくて、無知無学の者にもよく分かって、簡単に入れるようなものでなければならなかった。それで、新たに起こった仏教は、いづれも前時代のものとは大いに趣を異にして、平易な、平民的なものばかりでした。

### 浄土念仏の教え

このうち最も先きに現れたのは浄土念仏の宗旨です。この世は仮の世界であり、未来の世、即ち死後の世こそ真の世界であるから、人はそこへ往ってから、いつまでも安楽に生きるようにしなければならぬ、—— この生き方が、第一に先づ当時の一般の者の考えによく合っていました。—— それには、西方極楽浄土で人を皆救おうとしている阿弥陀仏の本願を只管に信じて、南無阿弥陀仏とその名号を一心に唱えるがよい。そうさえしていれば、別に学問や修業はしなくとも、阿弥陀仏の願力で、誰でもみな成仏して、死後は極楽浄土に往って生まれ変わることが出来るというのです。この名号を唱えることが即ち念仏なのです。

### 空也上人

尤も、この念仏を一番先に唱え出したのは、朱雀天皇の御代—— 平将門が東国に乱を起こした頃—— に出た空也上人で、上人は念仏を唱え、鉦を叩いて、京都の市中を躍りまわって、広く一般の民衆をこの信仰に導こうとしたのですが、時代がまだ早すぎたせいか、上人の念仏は広く世間に行われるまでには至らなかった。この浄土念仏の教えが、その後、幾人かの熱心な僧侶に依って、幾らかづつ発達

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

していたのが、ついに高倉天皇の御代に僧源空、即ち法然上人の手で浄土宗という立派な一つの宗旨となったのであります。

### 法然の開いた浄土宗

法然上人は美作(岡山県北部)の人で、9才の時に仏道に入ってから、これまでの各宗の教えを研究すること実に35年、あらゆる知識に知識を重ねて、何もかも一切を心得た後に、43才のときに初めて浄土宗を開いたのです。念仏さえ唱えれば、悪人も貧民も無知の者も罪人も、誰も彼も一切救われて、極楽に行ける。「悪人なら救われる。況や善人おや」というのですから、この宗旨は忽ち非常な勢いで世の中に弘まった。

ところが、彼の弟子の中には、法然の真意を知らずに、みだりに他宗を謗って、「自分たちは阿弥陀仏のお蔭で極楽に行けるが、他宗の者にはそれが出来ないから、みんな地獄に落ちる」と言ったり、中には更に増長して、平気で戒律を破る者などもいたので、さもなくてさえその盛んなのを妬んでいた他宗の者から朝廷に訴えられて、ついに法然は讃岐(香川県)に流され、弟子の中には死刑に処せられた者が四人、諸方に流された者が五人ありました。

幸い法然のみは、間もなく許されて摂津の寺に入ることが出来たが、京都へは更に4年の後に還ることを許されて、その翌年、80才で東山の太谷で亡くなった。後に円光大師と諡されました。京都の知恩院は今、浄土宗の本山です。

### 親鸞の開いた真宗

法然が讃岐(香川県)に流された時に、越後(新潟県)に流された弟子に善信房というのがいました。これが後に真宗を開いた親鸞です。親鸞は京都の人で、9才の時に出家して、10才の時から叡山(訳注:比叡山)や奈良に学んで秀才の誉れが高く、天台、華嚴、法相、三論などの諸宗の知識を十分に得て後、二十九才の時に始めて法然の弟子となって浄土教を研究するようになったのです。

越後(新潟県)に流されたのは36才の時でしたが、その後、39才で流罪を赦されてからは、下野、常陸、相模、美濃などの諸国に広く教えを説いた。その教えは浄土宗と全く同じで、一心一向に阿弥陀仏を信じて、その名号を唱えさえすれば救われるというのでしたから、浄土真宗とも、又、一向宗ともいっていましたが、ただ、僧侶の身でも魚肉、獣肉を食べてもよく、又、妻を娶って家庭を持っても差し支えがないと説いたところが違っていた。

しかし、これがために、どんな俗人でも念仏さえ唱えれば必ず救われるという事を、一層容易に一般の者に信じさせることが出来て、この宗旨は殊に早く弘まった。又、親鸞は、「親鸞は弟子一人も持たぬ」といって、すべての信者を、男女の別なく、同行、同朋、門侶などと呼んだ。凡そ念仏を唱える者は誰も彼も同等で、上下の隔てもなければ尊卑の別もなく、すべて同門の仲間であるという意味です。浄土真宗を門徒宗ともいうのはここから来ているのです。

親鸞は63才の時に27年振り京都に帰って、その後も静かに教えを説いていたが、ついに90才で

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

京都で亡くなりました。後に、**見真大師**と**諡**せられた、京都の本願寺はその本願寺で、今は東本願寺と西本願寺との二つに分かれています。今も全国にわたってその信徒は非常に多いのです。

### 他力宗と自力宗

真宗や浄土宗が阿彌陀仏の本願の力で、即ち他力で極楽往生が出来ると説くのを他力本願というのに対して、禅宗のように、自分の修業の力で悟りを開くのを自力宗といいます。この禅宗は、遠く第36代孝徳天皇の御代に、法相宗と共に初めて中国から輸入されて、その頃、これを学んだ者も相当にいたのですが、まだ時機が熟さなかったのか、さほどにも弘まらずに中絶していたのが、鎌倉時代になって、大いに興ったのです。この禅宗に2派あります。1つは臨済宗で、1つは曹洞宗です。

### 栄西の伝えた臨済宗

臨済宗を開いたのは僧**栄西**です。栄西は備中(岡山県)の人で、11才の時に出家してから、諸所で仏教を学び、28才の時に中国の宋に渡って、その翌年、一旦帰ってきたが、更に大いに研究しようという志を抱いて、47才の時に再び宋に渡りました。そのころ、中国では禅宗が最も盛んでしたので、彼は専らこれを学んで四年の後に帰って来た。実に後鳥羽天皇の建久2年7月で、源頼朝が征夷大將軍に任ぜられて幕府を鎌倉に開いた前年の事です。

栄西が初めてわが国に禅宗を伝えたのは、その年の8月8日、肥前の国(佐賀県)ででしたが、その宗旨が大いに盛んになったのは、それから8年の後、59才で鎌倉に入ってからのもので、浄土宗や真宗ほどには平易ではなかったが、すべての人間には、もともと仏心が備わっているのですから、経文などを多く読まなくとも、十分に心を研いて、よく考えさえすれば自ら悟られるというのです。

その説き方が頗る簡単明瞭でしたので、武士の間に広く行われて、尼將軍の政子や將軍の源頼家、実朝などもその信者となった。そして心を研くためには、主として座禅に依る事となっていたので、一般に禅宗といえ即ち座禅の事のようにも思われた。栄西は後に頼家から京都に建仁寺を建てて貰い、75才の時にそこで亡くなった。今、建仁寺は臨済宗の本山となっています。

### 道元の伝えた曹洞宗

曹洞宗を開いたのは、栄西の弟子の**道元**です。彼も栄西と同じく座禅の必要を説いたのですが、その意義の解釈が栄西とはちがってました。同じく禅宗でありながら、2つの派のある所以がここに在ります。道元は殊に戒律の厳しい人で、普段の修行を最も重んじた。彼は、人々が正しい信仰をもって日々の修行さえ怠らなければ、貴賤の別も、賢愚の差もなく、皆、平等に悟りを開くことが出来ると説いた、いくら経文のみを多く読んでも、正しい修行をしないものは悟りを開くことが出来ない。正しい修行をするには善をなして悪をしないということが最も肝要であるといった。要するに、人間は自分にもとから備わっている仏心を最もよく發揮するようにすべきであるといったのです。

道元は京都の人で、早く父母に別れて孤児となったので、13才の時に出家し、叡山に上って天台宗

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

を学んだ後に、<sup>えいさい</sup>榮西の弟子となったのですが、24才で宋に渡り、28才で帰って来て曹洞宗<sup>そうとうしゅう</sup>を伝えたのでした。その後、<sup>ときより</sup>執権の時頼に再三招かれたので、48才の時に初めて鎌倉にやって来ました。<sup>ときより</sup>時頼が非常に喜んで、一寺を建てて土地も寄付しようとしたにも拘らず、<sup>きふ</sup>道元は固く辞して、その以前から住んでいた越前（福井県）の永平寺に帰った。

多分、幕府の保護の下に豊かな財産を得ると、却って門下の僧を墮落させる事になり易いを知って、これを辞したのでしょう。<sup>えいさい</sup>榮西が幕府の保護を受けて、大いに臨濟宗<sup>りんざいしゅう</sup>を弘めたのは全くその行き方が違います。<sup>どうげん</sup>道元は後深草天皇の御代に54才で京都で亡くなりました。

### 日蓮の開いた法華宗

この<sup>どうげん</sup>道元の亡くなった同じ年に、<sup>にちれん</sup>僧日蓮が天台宗<sup>てんだいしゅう</sup>から出て、新たに法華宗<sup>ほっけしゅう</sup>を唱え出しました。「南無妙法蓮華經<sup>なむみょうほうれんげきょう</sup>」とお題目をさえ熱心に唱えれば、たとえその理屈は分からなくとも、法華經の功德<sup>ほっけきょうくどく</sup>によって現世並びに未来が救われるというのです。その開祖が日蓮であるので日蓮宗ともいいます。

<sup>にちれん</sup>日蓮は安房の国（千葉県）の小湊で生まれ、12才の時に安房の清澄寺<sup>きよすみでら</sup>に上って、<sup>どうぜん</sup>道善という坊さんの下で仏学を修めたのですが、知識が進めば進むほどいろいろの疑問が起こって来た。とりわけ最も彼の心を苦しめたのは、<sup>ほっけ</sup>仏の教えは一つであるべき筈であるのに、その頃の世の中を見ると、<sup>ぶつぼうしゅう</sup>仏法は8宗にも10宗にも分かれて、めいめいかけ離れた教えを説いているのみならず、その信心している本尊にも、<sup>だいにちによらい</sup>大日如来だの、<sup>あみだぶつ</sup>阿弥陀仏だの、<sup>ふどう</sup>不動だの、<sup>やくし</sup>薬師だの、<sup>じぞう</sup>地藏だの、<sup>かんのん</sup>観音だのとさまざまあるが、<sup>せけん</sup>世間の人はこれを不思議と思わないで、どの仏でも拜めば利益があるように思っている。一体これでよいのであろうか、という事でした。

<sup>ぶつぼう</sup>仏法とは、そんなに幾つにも分けられるものなのか？ そんな事で、人の心に真の安心<sup>まことあんしん</sup>を与えることが出来るであろうか？ 彼はこういう疑問を抱いて17才の頃から鎌倉に出て、22才の頃には比叡山に登って更に大いに仏法を学んだ後に、他の諸大寺をも経廻って諸宗の教えを究めた。

その結果、<sup>きょうもん</sup>仏教の数多い經文の中で、<sup>ほっけきょう</sup>法華經、―― 詳しく言えば<sup>みょうほうれんげきょう</sup>妙法蓮華經―― のみが<sup>ほっけ</sup>仏の真意を伝えるものであって、その他の<sup>きょうもん</sup>經文はすべて不完全な教えに過ぎないという断定に達したのです。そこで、この<sup>ほっけきょう</sup>法華經に基づいた<sup>ほっけしゅう</sup>仏教、即ち法華宗を大いに興すことが<sup>ゆえん</sup>真の仏教を伝える所以であると彼は考えて、32才の時に、15、6年ぶりで故郷に帰ると、いよいよ新しい宗旨を開いてこれを弘めることに覚悟を定め、<sup>ごふかくき</sup>後深草天皇の<sup>けんちょう</sup>建長5年4月28日の朝方早く、まだほの暗い<sup>きよすみやま</sup>清澄山の頂<sup>いただき</sup>に立って、はるかに涯を知らぬ太平洋を望みながら、その水平線上に太陽が躍るが如く、湧くが如く



にちれんしょうにん  
日蓮上人

にその半輪を現した瞬間に、初めて大音声に、「南無妙法蓮華經」と7字の題目を唱えたのでした。

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

その後、彼は主として鎌倉に住んで、専ら法華経の功德を説き、盛んに他宗を攻撃した。そのため、幾度も他宗の暴徒に襲撃されて、命の危ない事もあったが、それにも屈せず、ついには時の執権に書をたてまつって、他宗の信仰は正しくないのであるから、これを禁ずようと迫り、「念仏は無量地獄の業、禅宗は天魔の所為、真言は亡国の悪法、律宗は国賊の暴説」などという烈しい言葉を使って、他宗を罵ったりした。

それやこれやのために罪せられて、1度は伊豆に、1度は佐渡に流されたが、後に赦されて帰ると、甲斐（山梨県）の身延の山中に入って、草庵を結んで住んだ。今の本山の久遠寺のある所が即ちそこです。その後は、この寒くて不便な山中を一步も出ずに、八年の余も籠っていたので、61才の時には既に健康を害していたので、弟子や信徒らに熱心に勧められて、常陸（茨城県）のほうの温泉に行くために山を出たが、武蔵の池上（東京品川区）まで来ると、ついに病気が重くなって亡くなった。時に第9代後宇多天皇の弘安5年10月13日で、実に2度目の元寇を撃退した翌年の事です。日蓮は後に立正大師と諡せられた。

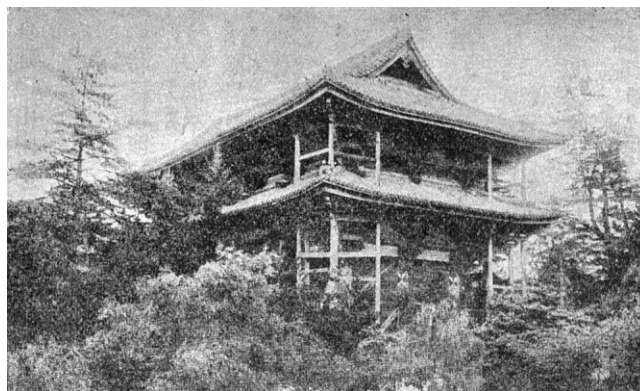
また、後宇多天皇の御代には、僧一遍が浄土宗から出て時宗を開き、諸国を行脚してその宗旨を弘めた。世に遊行上人と言われている。

こういう風に、この時代に興った新しい仏教は、主として武士や平民を相手としたので、これまでのような貴族を相手としたものとは違って、何れも簡単な入易いものとなったのみならず、これを弘めるためにも各宗の僧らが遠く各地方を巡って教えを説いて歩いたので、非常な勢いで広く全国に弘まったのであります。

また、美術や工芸の上にも、この時代の特色は明らかに現われた。それは武家趣味、仏教趣味ともいべきもので、平安時代の優美な貴族趣味とはちがひ、専ら素朴な、勇壮な、活気のあるものが尚ばれたのです。

### 建築の新様式

先づ建築についていうと、嘗て平重衡の軍によって焼かれた奈良の東大寺を、この時代になって源頼朝が再建しましたが、その時、主となり建築の事に当たった俊乗坊重源は、宋に渡って新しい建築の様式を輸入した。所謂天竺様というのがそれで、平安時代の様式に比べると、はるかに雄健な風に富んでいる。今も東大寺の南大門はその時のままで残っている。この天竺様が鎌倉時代



奈良 東大寺の南大門



鎌倉 円覚寺の舍利殿



## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

の初期に栄えた後を承けて、その後、禅宗が行われると共に唐様というのが新たに輸入された。禅宗の寺院に適したもので、今も残っている鎌倉の円覚寺の舍利殿はその様式です。しかし後には、これらの様式と平安時代から伝えて和様とが巧みに融合して、次第に新しい様式も出来て来ました。

### 雄健な彫刻

彫刻もまたこの時代の一般の好みにつれて、雄健なものが多く出た。平安時代の名高い仏師定朝の子孫である康慶、運慶、湛慶の一家は、この時代の彫刻家として、とりわけ傑出していました。運慶は康慶の子で、康慶の弟子の快慶と共に東大寺の南大門の仁王の像を作った。この像は高さ8.4mという頗る大きなもので、その面相や逞しい筋肉や衣紋などが中々巧みです。湛慶は運慶の子で、やはり多くの傑作を残した。世に運慶の作、湛慶の作とあって、無理にも彼らをその作者として伝えようとしている彫刻の頗る多くあるのを見ても、いかに彼らがすぐれていたかという事が分かります。

### 戦争画と宗教画

絵画もまた時代の影響を受けて、戦争画と宗教画とが多く出た。殊に絵巻物類が多かった。住吉慶恩の『平治物語絵巻』は運筆が雄健で、色彩の配合がよいので聞こえ、土佐長隆の『蒙古襲来絵巻』は文永の役にわが将士が奮闘した有様をよく現しているのだから知られています。

また、宗教画では、諸社寺の縁起物や『法然上人行状画伝』『親鸞聖人画伝』『一遍上人画伝』のような、諸宗の開祖の一生を絵で書いたものにすぐれたものが多かった。又、肖像を多くのに巧みな藤原隆信が出て、多くの人の像を画いたが、中でも、源頼朝の像は最もすぐれているといわれています。その子の信実も肖像画に巧みでした。

また、武器は時代の必要にもなつて大いに発達した。ことに刀剣の製作は精巧をきわめて、日本刀の名は中国の宋にまで響き渡ったほどです。後世に永く名人として知られた粟田口吉光、岡崎正宗、郷義弘の如き刀工もこの時代に出たのです。世にこの3人を刀剣界の三絶と呼びました。

また、陶器もこの時代に著しく進歩した。これは加藤景正という人が、僧道元が宋に渡った時に従って行って、彼の地の陶器の製法を学んで帰り、尾張の瀬戸（愛知県）で宋風の陶器を作り出したからであり、これが瀬戸焼の起こりですが、陶器の事をすべて瀬戸物というようになったのも亦これからで



運慶作の仁王像（奈良 東大寺南大門）

## 第5話 鎌倉時代の仏教文物

あります。

この陶器の進歩に就いて序に言っておきたいことは、道元の師の栄西が初めて茶の種を宋から持って帰って、諸国に栽培させたことです。茶の趣味が次第に広く弘まるにつれて、それを飲むのに必要な茶碗やその他の器具の需要が起こり、そこで陶器の製法を学ぶために宋に渡る事になったのもあろうと思われるからです。

( 第5話 鎌倉時代と仏教文物 終わり。 次は前頁に戻り、 第6話 元寇 へ)